

◇牧師室より◇

8月の教会学校は「平和月間」として、教会員の平和に関する説教で礼拝を守った。5名の方々は絵本や自分で作った視聴覚教材を使って、戦争と平和についてお話しくださった。平和は不断の問題であるが、8月は敗戦月だけに特別な月である。この月政治的には、国会終了前に戦争準備としか思えない重要法案がバタバタと成立した。佐高信氏はこの状況を「地獄の釜の蓋が開いた」と表現している。

新聞・テレビは54年も過ぎたからか、戦争に関する企画、報道は少なくなった。「家族の肖像」というテレビ番組があった。有名な「一木一草焦土ト化セン 糧食六月一杯ヲ支フルノミナリト謂フ 沖縄懸民斯克戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」という電報を打って自決した大田実海軍少将の残された家族の戦後を追っていた。彼らは軍人の子供として過酷な生活を強いられた。社会科の教師になった息子さんが、沖縄に対する父親の遺言は

果たされていない、又子沢山で口減らしのため養女にやられた娘さんが「沖縄で自決してくれて良かった。生きて帰られると困る」と語っていた。父親の自決を容認せざるを得ない戦争は残酷である。

朝日歌壇の8月はさすがに戦争に関する歌が多かった。「軍靴捨て鉄帽捨ててひた歩く歩けぬ兵は命捨てたり」。「壮丁前の現地召集の少年兵凍死せしは俘虜一年目の冬」。兵隊は最前線に送られた身分低く、弱い者から死んでいく。「めぐり来て感銘深し無言館絵も書も残せず死にし兵想う（寺西金一）」。無言館には、夭折した戦没画学生たちが残した命の証の絵が集められている。「きけわだつみのこえ」は学徒動員で散っていった若者たちのうめきが綴られている。寺西氏は何も残せずに戦死した兵に想いを寄せている。その声なき兵士たちと爆撃に晒されて死んだ一般市民、そして侵略されて理不尽に殺されたアジア諸国の人々、彼らが味わった恐怖と無念さは測り難いが。

週 報

1999年9月5日 聖霊降臨節第16主日

巻20

23号

1999年度 教会主題

「互いに仕え合う」

聖句 兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。

ガラテヤの信徒への手紙 5章13節

- 目標
1. 生活を整えて礼拝、諸集会を守る。
 2. キリストの体なる教会形成に参与する。
 3. 教会創立20周年記念に備える。

日本キリスト教団

横浜港南台教会

横浜市港南区港南台7丁目8-29

郵便番号 234-0054

電話 045-833-5323

F A X 045-833-6616

振替 00290-4-13994

牧師 秋吉隆雄